

---

# テク×2（テクテク）

沢崎翔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

テク×2（テクテク）

### 【Nコード】

N6115Y

### 【作者名】

沢崎翔

### 【あらすじ】

24時間で100kmを歩くイベント（通称100ハイ）を通して様々なことを感じ、成長する3人の大学生の青春群像劇です。

主人公？：中井雄浩  
なかいたけひろ

恋に奥手な大学3年生。しかし100ハイでは、同じ部活の後輩である青木奏と一緒あおきかなでに、2人きりで歩くことになる。

主人公？：深谷春美  
ふかやはるみ

しっかり者の大学4年生。今回の100ハイは歩かず、サポート役に徹する。100ハイをきっかけにペアだった男の先輩と付き合うようになるが、その後別れてしまったため、100ハイに苦い思いを抱いている。

主人公？：松山哲<sup>まつやまさとしる</sup>

お調子者の大学2年生。1年生の時に参加した100ハイでは完歩できなかったため、今年の100ハイに懸ける思いは強い。

## 1 歩目：100 ハイ×ペーゴマ

24 時間以内に100 kmを歩いたことのある人が、一体どれほどいるだろう。

…まあ、僕はあるけど。それも、2回。

100 kmっていうと、マラソン2回分よりも長い。東京から熱海まで行けてしまうほどの距離だ。

それだけの距離を歩くものだから、ゴール付近になるともう、一歩踏み出すたびに足の骨が粉々に砕けるような激痛に襲われることなんか当たり前。

ゴールした後だって、その場で着の身着のまま眠り込んでしまう人や、痛そうな顔をしながら足にできたマメを潰す人もザラにいる。

休憩所に広がるその光景は、まさに戦場の野営病院を彷彿させるほど凄惨なものだ。

それだけのダメージを体に与えるほど過酷なイベントだから、当然後遺症もひどい。

完歩から一週間以上経っても杖なしでは歩けない人や、中には足を疲労骨折してしまう人もいる。

幸い僕はそこまでひどい後遺症に悩まされたことはないんだけど、たまに長時間立ち続けていたりすると、左足首の外側が痛くなってくることもある。たぶんそれも、後遺症の1つだと思う。

じゃあ、一体何のために？

完歩したら100万円がもらえると、テレビで取り上げられて  
有名人と会えるなんていうおいしい要素なんか一切ないのに。

そんなに辛い思いをしてまで、一体僕は、何のために100km  
も歩くのだろう？

…わかんない。何でだろう？

いや、特に深い理由なんかないんだよ、きっと。

だって、嫌だろうがなんだろうが、歩かなくちゃいけないんだも  
ん。

それが、100kmハイク。

都のボーイスカウト連盟が毎年11月に開催している、かなり狂  
ったイベントだ。

だって24時間で100kmも歩くんだよ？もちろん、寝ないで。

「狂歩」と書いて、「100ハイ」と読みます。…なんてね。

さて、少し話が脱線してしまったけど、そもそもそんな面倒くさ  
くて辛いイベントに、何で僕は参加しなくちゃいけないのか？

実はそれは、僕が大学で入っている部活と関係がある。

それが、ローバークルー部。

ちよつと変わった名前の部活だけど、要するに「ローバークルー」  
っていうのは、ボーイスカウトの大学生バージョンだと思ってくれ  
たらいい。

そんな聞き慣れない名前の部活に興味本位でなんとなく入ってし  
まったのが、運の尽きだった。

実はこの部活、都のボーイスカウト連盟に加盟している。

だから当然、連盟が主催する100kmハイクには、加盟団体の  
一員として参加しなくちゃいけないのだ。

ああ、2年前、かわいい女の先輩たちに唆されて入部届にはんこ  
を押してしまった自分を殴り飛ばしてやりたい！

…まあ、今さらそんなこと言ったって仕方がないんだけど。

とにかく、早くこのアンケートを埋めなきゃ。

そう、申し遅れましたが僕ことなかいたけひろ中井雄浩は今、今年で3回目を迎  
える100kmハイク 通称100ハイに関するアンケート用紙  
を前に、もう1時間近くも無駄にうだうだ考え込んでしまっている  
のだ。

「目指せ、100ハイマジック！あなたがラブを咲かせたい人は  
だれ？ぜひ×2指名してちょ（も・ち・ろ・ん、「さきこ」つ  
て書いても大歓迎だよん？）」

…イタい。イタいよ、咲恋。なきこ

名前もイタいけど、この質問のテンションはもはや読むに堪えないよ。

「恋が咲く」という名前を付けられてしまったばかりに、「わたし、今まで恋なんか咲いたことないもん！」と開き直ってみんなから憐もりのさみに満ちた失笑を誘うのを得意とするのが、僕の同期である森野咲恋きこという女の子だ。

そんな彼女だけど、今回の100ハイでは部活の代表者として、連盟の人たちといろいろやり取りをしている。

更に彼女は今回の100ハイで、誰もがうらやむ「ある権利」を握っている。

それはローバー部員なら、一度は乱用…いやいや、願わくば使わせて頂きたいなあと思うもの。

…100ハイで一緒に歩く、男女ペアを決める権利だ。

そう。100ハイは原則的に、男女2人ペアで歩く。

真夜中に人気のない田舎道を歩くこともあるから、安全上の問題のため、夜間に女の子が1人だけで歩くことが認められていないのだ。

だから女の子が歩く時は、必ず男とペアになって、一緒に歩かないといけないというルールになっている。

…これで何かが起こらないわけがないじゃないか！

実際、僕の1学年上に当たる女の先輩なんかは、2年前の1000ハイが終わってからしばらく経った後、ペアを組んでいた男の先輩と別の意味でゴールインしてしまった。本当にうらやましい限りだ。

生まれてこの方、女の子とデートしたことさえない僕としては、1000キロを歩くだけで彼女できるんだったら、足の1本や2本くらい、全然潰したって構わないと思う。

それに付き合うには至らないまでも、1000ハイの前よりもずっと仲良くなるという男女ペアはけっこう多い。

やっぱり、1000キロを24時間以内に歩くという極限状態の中では、普段はだらしがなくていい加減な男だってどこか頼もしげに見えるし、いつもはうるさくて小憎らしい女の子でさえ、不思議とかわいく見えてしまうものなのかも知れない。

そしてそういった数々の現象を、人は俗に「1000ハイマジック」と呼ぶ。

結局、それが目当てで1000ハイに参加するという人も少なくないんじゃないかと、僕は思っている。

ていうか、そうでなければ僕たちは、ただ頭が狂っているだけのDM集団だ。

そんなわけで僕は今、今年の1000ハイのペアを決めるかも知れないこのふざけたテンションのアンケートに、ある女の子の名前を書こうかどうか、真剣に悩んでいる。



シャーペンを置き、頬杖を突きながら窓の外の景色をぼんやり眺める。

10月の常盤松大学ときわまつだいがくのキャンパスは、2週間後に迫った大学祭の準備に追われる学生たちの姿で賑わっている。

僕が今座っている所からは、お揃いのパーカーを着た何人かの集団がダンスの練習をしている光景が見て取れた。

みんなしてベーゴマのように、忙しそうにくるくると回り続けている。

一体あの人たちは、何が楽しくてあんなにぐるぐる回っているんだろう。

まあ、そんなことを考えたって仕方がないか。

あの人たちからすれば、僕が1ヶ月後に100kmを歩こうとしていることだって、意味がわからないことだと言い出すに決まっている。

でも、今回の100ハイは、僕にとって特別な意味を持つ。

「今年の100ハイ、一緒に歩いて下さい」

そう言った彼女の言葉が、さつきから頭の中で何度もリフレインしている。

本気で言っただろうか。でも、もうかなり前の話だもんなあ。

…そうだよ、忘れているに決まっている。

何期待しちゃってんの？

止めときなよ。どうせ、またイタい思いをするだけなんだからさ。

過去のトラウマが、僕の右手にその子の名前を書くことを躊躇させる。

でも…。

もし彼女があ那时的約束を覚えてくれていて、このアンケート用紙の同じ項目に、僕の名前を書いてくれたとしたら…。

ため息をついてから、再びシャーペンを手に取る。

書こう。…いや、やっぱり無理。さつきから、そんな堂々巡りの繰り返し。

本当に情けない。結局僕は、いつもこうだ。

2回も完歩したくせに、いざ恋愛となると、最初の一步さえ踏み出すことができない臆病者なんだ。

はあ、君のアンケートを見ることができたらなあ。

…ねえ。

君は本当に、僕の名前をちゃんとここに書いてくれたのかな？

…  
奏<sup>かな</sup>ち<sup>で</sup>や  
ん。

## 1歩目：100ハイ×ペーゴマ（後書き）

はじめまして、【1歩目】を読んで頂き、ありがとうございます。

さて、物語中に登場する「100ハイ」は、実在しているイベントです。

そしてこの話は、僕が実際に100ハイに参加した経験をもとに書いています。

だから「足を疲労骨折するなんて、そんなバカな」と思っている方。事実です。

ウソだと思ったら、100km歩いてみて下さい。

…冗談です。

さて、この物語の主人公の1人である中井さんが100kmの道を歩き出すのはもう少し先の話になりますが、どうかその日が来るまで、読み続けて頂けたら嬉しいです。

2 歩目：豚×クラT（前書き）

【2 歩目：豚×クラT】

## 2 歩目：豚×クラフ

あおきかなで  
青木奏ちゃんあおきかなでは僕と同じ部活で1つ下の後輩に当たる、ちょっと変わった女の子だ。

「豚を食べに来ました。ここ数日、もやししか食べてなかったんで、  
そう言って、彼女は何の前触れもなく、ひょうひょうとした様子で現れた。」

その日は地域の大学生ローバーローバーが何人が集まって、幼稚園くらいのボーイスカウトのこどもたちに、豚の丸焼きを振る舞うというイベントの日だった。

常盤松大ローバー常盤松大からは役員である僕と咲恋まっ、それに2年生の松山哲やまのしるが参加することになっていたんだけど、まさか奏ちゃんが来るなんて。

そんな話全然聞いていなかったから、僕はすっかり面喰らってしまった。

「ありがとう、奏ちゃん！来てくれて」

そう言って、咲恋がはしゃいだ様子で話しかける。

「ねえ、聞いてよ、奏ちゃん。他大の子がメールでさ、『オレ、今日バイト入ったの忘れてたわ』…お前、ふざけんなよ、ジーザス！って感じでさ。ちょうど困ったところだったんだよね」

「マジですか？よっしゃ、豚が1人分浮いたぜ」

そう言って、奏ちゃんが小さくガッツポーズを取る。

ああ、この子、絶対に何か勘違いをしている。食べるだけじゃないんだよ？僕たちが焼くんだよ？豚を。ちゃんと働いてくれるのか、なんだか心配になってきた。

やっぱり、彼女はどこか変だ。何かがみんなとずれているようにしか思えない。

女の子なのに、しゃべり方はどこか男っぽいし、おしゃれにも全然無頓着なようだ。

最近は暑いからって、上はダボダボのＴシャツのヘビロテ。しかも今日は、よりによって高校時代のクラスＴシャツの日かよ。もう何回見たことか。ドクロのマークが背中に描かれた、紫のクラＴ。

そんな格好で、平気な顔して新宿や渋谷の街中を出歩くんだもん。恥ずかしくないのかなあ。今日だって、他大の人たちもたくさんいるのに。

こんな感じで、化粧品を買いまくらなら一週間豪勢に肉を食べ続けるって言い切るのが、青木奏という女の子…って、あれ？

おかしいなあ。女の子っぽい要素が、1つもないぞ？

「ねっ？見てよ、こどもたち。たくさんいるでしょ？みんなかわいいよねー」

「えっ、こんなにいるんですか？参ったなー、わたし、こども嫌いなのに」

性別不詳な奏ちゃんが頭を掻きながら面倒くさそうに言う姿を、遠目から見つめる。

…ああ、あった。女の子っぽい要素。

長い髪。しかも、墨をこぼしたみたいに黒くてきれいなストレートヘア。

それとコントラストを描いて際立つ、白くて透き通った肌。

そしてどこか醒めた印象を抱かせる、切れ長の目。

「まあ、豚だけ食べて、さっさと帰ればいいか」

がくつ。せつかく人並み外れてかわいく生まれてきたのに、中身の方はもつと人並み外れているからなあ。

彼女が普段何を考えているのか、本当によくわからない。

そんな彼女のことを「火星人」と呼んで煙に巻く人も少なくないけど、僕は嫌いじゃない。

むしろ、うらやましいとさえ思ってしまう。

彼女は、ちゃんと自分を持っている。

常にふらふらしながら生きている、僕とは違う。



僕も彼女みたいに、堂々と自分をさらけ出すことができたらなあ。

…いや、でも、さすがにクラTを着る勇氣はないな。

まあ、落ち込んでいても仕方がない。時間になって、メガネをかけた男の人が集合をかける。どうやら、彼が今日のイベントの責任者らしい。

いくつくらいだろう、少なくとも、大学生のようには見えない。

集まった大学生スタッフにいろいろ指示を出すんだけど、その異様に高い声が耳にまわりついて、かなりうっとおしい。

しかも妙に馴れ馴れしくせに、言っていることがイマイチよくわかんないし。本当に大丈夫なの、この人？

それでも、豚を焼く台座を組み立てる手際の良さは、お見事と言っしかなかった。

難しいのに、炭に火を点けるのだって、3分もかからなかった。どうやら、彼のボーイスカウトとしてのスキルは、本物のようだ。

「すごいでしょー？あの人、夏目さんなつめって言うんだけど、間瀬田大ませただい学がくローバーのOBさんで、今はプロのスカウトをやってるんだって」

「…で？今はどんな仕事をしてるって？」

「えっ？だから、プロのボーイスカウトだってば」

「ねーよ、そんな職業！」

要するに、ただのニートじゃん。やっぱりヤバいな、あの人。あ  
あいう大人にだけは、なりたくないな。

## 2 歩目：豚×クラフ（後書き）

ローバークルーはボーイスカウトの大学生版ということで、こういった活動も行っていました。

他にも地域のこどもを連れてハイキングをしたり、餅つきをしたこともあります。

### 3 歩目：火星人×しゃくれアゴ星人

さて、順調に焼き始めた豚だけど、実はここから先が長い。

炭の遠赤効果でじっくり炙るものだから、夏目さん曰く、焼き上がるのに5時間近くもかかるそうだ。

うわー、みんなお腹を空かせて帰っちゃうよ。僕も帰りたいけど。

そうさせないために、今からおにぎりを作る班と、こどもたちと遊ぶ班に分かれるという。

どっちの班がいいか、手を挙げて選んで欲しいと夏目さんが説明する。

その結果、僕たち常盤松大ローバーの4人は咲恋以外、みんなおにぎりを作る班を選んだ。みんな小さいこどもが嫌いだからだ。

ははっ、僕たち、一体何をしにここに来たんだろうね？

ええ、そうですよ。僕も松山も、じゃんけんに負けたせいでこんな雑用をさせられているのだ。

そうでもなければ、誰が貴重な休日を犠牲にしてまで好き好んでこんな所に……って、奏ちゃんはそのクチだったか。

「中井さん。知ってますか？豚の脳みそって、中国では珍味として重宝されているんですよ」

「ご飯をよそいながら、奏ちゃんがそんな豆知識を披露する。なぜか彼女は、こういうマニアックな方面に異様に詳しくたりする。」

「しかも『豚の脳みそスープ』っていうのがあって、写真を見たんですけど、もうそのまんま、豚の脳みそがスープの上にプカプカ浮いてて…」

「きめーよ、お前、いつもそんなもの食ってんのかよ？」

気持ちよさそうに話す奏ちゃんの言葉を、松山がすかさず遮る。

この2人、同じ学年なんだけど、いつも何かにつけて言い合っている。

そりやあもう、「ケンカするほど仲がいい」なんてレベルじゃない。たぶん、本当に仲が悪いんだと思う。

「食ってねーし、基本毎日もやしだし」

「ウソつけ！お前、どうせまた貧乏の振りをして同情引こうとしてるだけだろうが！」

「うるさい。黙れ、しゃくれアゴ星人」

「だーれがしゃくれアゴ星人だあ！」

また始まった。みんなが見ているのに、恥ずかしいなあ、もう。

でも松山のアゴはよく見ると、確かに少しだけしゃくれている。

そして文字通り、かなりしゃくに障る男だ。

とは言っても、社交的で行動力がある松山に対して、僕が一方的に妬んでいるだけだ。

そう。僕は松山が苦手だ。

自分とは対極的な存在っていうのもそうだけど、何よりも僕は彼に、これ以上ない弱みを握られている。

「…あつ、思い出した」

握ったおにぎりを皿の上に置いてから、奏ちゃんがぼそりと呟く。

それにしても彼女が作ったおにぎり、野球ボールくらいの大きさなんだけど、あのこどもたちにはちよつと大きすぎるんじゃないのかなあ。

「あの牛乳瓶メガネの人、去年の100ハイでラジオ体操をやった人だ。ですよね？中井さん」

「えっ、夏目さんのこと？…さあ、覚えてないけど」

「いや、間違いないです。あの人、かなり変わってますよね。ヤバいな、わたしとキャラが被る」

「安心しろ。お前以上の変人なんかいないから」

「『プカ×2（プカプカ）』のアゴほどじゃないよ」

「何だと、てめえ、コラ！もういっぺん言ってみろ！」

もう、ケンカしてる暇なんかあったら、もつと手を動かしてよ。

ところで「プカ×2」というのは、奏ちゃんが松山に付けたあだ名だ。いつもタバコを「プカプカ」ふかしているから、そう呼ぶことに決めたらしい。

表記が「プカプカ」じゃなくて「プカ×2」なのは、「記号や数字が混じっている方が火星語っぽい」という彼女のポリシーがあるから。よくわかんないけど。

こんな具合で、彼女はいろんな人の特徴をもじっては「×2」と呼んでいる。

まあ、僕は普通に「中井さん」だけどね。要するに、それだけ無個性ってことか。うーん…。

#### 4 歩目：苦行×夢

それにしても、100ハイか。正直に言っつて、あんまりいい思い出はないなあ。

過去2回、100ハイに参加して、僕は2回とも完歩することができた。

でも、ちつとも楽しくなかった。

100ハイのペアは役員が決めるから、必ずしも気心が知れた人と一緒に歩けるとは限らない。時には男女比の関係で、3人で歩かなきゃいけないことだってある。

そんな組に入れられた日には悲惨だ。2人だけで会話が盛り上がって、あぶれた1人は寂しく地図を読みながら歩く。

僕は過去2回とも、そんな惨めなガイド役を強いられてきた。

だから100ハイマジックなんて、夢のまた夢。

僕にとって100ハイは、ただの苦行に過ぎなかった。

本当は僕だつて、女の子と2人きりで歩いてみたい。

いろんな話をして、いろんな景色を見て、せめてその100kmの間だけでも、本当の恋人どうしになったみたいに、甘い時間の中を歩いてみたい。



でも、絶対に無理だよ。

僕みたいなやつと一緒に歩いてくれる女の子なんか、いるわけがない。

いるとしたらあの子だけど、そのチャンスはもう、3ヶ月前に自らの愚行で潰してしまった。

本当に僕は、どうしようもないダメ男だ。

「…だから！あれは咲恋さんのせいだったんだって！」

まだ言い合っているよ。

実はこの2人、去年の100ハイではいずれも途中リタイアという結果に終わっている。だからそんなことで責め合ったって、虚しいだけだと思うんだけどなあ。

「咲恋さんが道に迷ったりするから！体力的にはまだ余裕だったのに、そのせいで足切りになっただけだっつーの！」

「うわー、人のせいにするなんて、しゃくれアゴの風上にも置けないやつだな、お前は」

「いいよ、置かなくても！」

「まあ、わたしは今年こそ、絶対に完歩するけどね」

「いいや、絶対に無理だね」

強い調子で、松山が言う。

「だってお前、全然地図読めねーじゃん」

「いいんだよ。そんなの別に、合理的にM&A方式で補っちゃえば」

M&Aなんて、奏ちゃんはまた小難しい言葉を使う。

要するに、地図が読める人とペアを組んで、その人について歩くってことかな。確かに、一番合理的で楽な方法だと思う。

「そういうわけで、中井さん」

えっ、どういうわけ？いきなり話題を振られて戸惑いつつも、奏ちゃんの方を見る。

「豚の脳みそは譲りますから、それで1つ、わたしに買収されてくれませんか？」

「はあ、買収？」

「今年の1000ハイ、一緒に歩いて下さい。中井さん、地図を読むのは得意ですね？」

その言葉は、僕の耳に3周遅れで入ってきた。

「…うん。いいよ」

「よしっ、交渉成立」

短く言ってから、彼女は再びおにぎり作りに精を出し始めた。

心なしか、野球ボールサイズだったはずのおにぎりが、砲丸サイズまで大きくなっているような気がする。

そんな彼女の様子を、僕はおにぎりを握ることも忘れながら、しばらく呆然と見つめるしかなかった。

今僕、100ハイに誘われた？

女の子から、サシで…？

そんなこと、もちろん今まで一度もなかった。

どうせ今年も適当な人と組まれて、ガイド役をさせられるものだばかり思っていた。

僕と2人きりで歩いてくれる女の子なんか、いないとばかり思っていた。

それなのに、こんな僕でも、「必要だ」と言ってくれる女の子がいるなんて。

100ハイマジック、か。

「みんなー！おにぎり足りないよー！ほら、もっと頑張って！」

部屋に入ってくるなり、夏目さんが僕たちおにぎり班を急き立てる。

「中井くんも、作ったおにぎりはここに置いて」

夏目さんに言われるがままに、ぼんやりしながら三角形になり損ねたおにぎりを銀皿の上に置く。

…こんな僕だけ。

100ハイなんか、苦行でしかないって思ってた僕だけ。

今回ばかりは、ちょっとくらい、夢を見たっていいよね？

#### 4 歩目：苦行×夢（後書き）

以上、中井さんと奏が100ハイで一緒に歩く約束をするエピソードでした。

100ハイですつと寂しい思いをしてきた中井さんにとって、奏の誘いは夢みたいにうれしいことなんです。

次回より、10月の話に戻ります。

## 5 歩目：書く×書かない

窓の外には、相も変わらずぐるぐる回り続けるベーゴマ集団の姿が見受けられる。

すごいなあ。まあ回すだけなら、僕だって負けてないけど。持っていたシャーペンを机の上に放り投げ、うつ伏せになる。

書く。書かない。

もう一時間以上も、そんな不毛な悩みを頭の中でぐるぐる回し続けている。

何でだよ？ちゃんと約束したじゃないか。もっと自信を持てよ！

そう思っ て右手に力を入れるたびに、「もし、彼女があの時の約束を忘れていたら…」という不安が、僕の右手に繋がるあらゆる神経を切り裂き、動かなくしてしまうのだ。

そう。僕はひたすら、そのことだけを恐れていた。

あの日以降、本当は何度も本人に確認しようと思ったんだ。

「あの時言ったことは本気なの？」「本当に、一緒に歩いてくれるの？」って。

でも、訊けなかった。

そんなことを訊いて、「えっ、何の話ですか？」なんて言われる

ことを想像しただけでもう、1人で勝手に舞い上がっていた自分が恥ずかし過ぎて、頭がおかしくなってしまうそうだった。

だって、冷静に考えてみてよ。

彼女は別に、僕と歩きたいわけじゃない。

地図を読める人だったら、誰でもいいんだ。

あの時彼女が僕を誘ってくれたのは、100ハイの話題になって、たまたまそこに、地図を読める僕がいたから。

そうだよ。そんなにうまい話なんか、あるわけないじゃないか。

4限の終わりを告げるチャイムが鳴る。

そろそろこのロビーも、教室から出て行く人たちの群れであふれ返ってくるだろう。そこに飲み込まれるのは、なんとなく嫌だ。その前に、帰っちゃえ。

アンケートの締め切りは今日中だけど、もうどうでもいいや。

そもそも、この項目に特定の人物名を書く人なんか、まずいないって。恥ずかしいもん。空欄のまま、さっさと提出しちゃおうつと。

「…って。僕は一体、どこまでヘタレなんだよ」

「うん、そうだね」

いや、そこは少しくらいフォローしてくれても…って、あれ？

何で独り言に対して、返事が返って来るの？

はっとして声がした方に顔を上げる。

その瞬間、僕はまた顔を伏せたくなるような残念な気分にならずなっちゃったんだけど、それはさすがに失礼だと思ったから、何とか持ち堪えた。

「何してんの？咲…」

「あー！これ、100ハイのアンケートじゃん！」

そう言っただけで、僕の目の前に置いてあったアンケート用紙をぱっと取り上げる。

しまった、油断していた！

慌てて取り返そうとするけど、咲恋は器用に体をくねらせてそれを許さない。くそっ、丸っこい体のくせに、意外と素早い。

「…何よー、中井さん、肝心なところがまだ書いてないじゃん。締め切りは今日なんだよ？早くしてもらわないと、困りますなあ」

例の空欄を指しながら、咲恋がふくれっ面で文句を言う。

うぜー、こいつ、今授業が終わったところか。

何て運が悪いんだ。よりによって、アンケートを作った張本人に捕まってしまうなんて。



「…別に。空欄でいいんだよ、そこは」

咲恋から目を逸らしながら、ぶっきらぼうに言う。

「全然よくないよ。ペアを決める立場としては、この欄が一番重要なんだからさー」

そう言いながら、咲恋が隣のイスにさっと腰掛ける。

## 6 歩目：オブラート×ピエロ

「ねえ、誰と一緒に歩きたいのさ？ やっぱり、1年生？」

「いや僕、1年生の女の子と、あんまり話したことないし…」

「何さー。そんなこと言ったら、2年生の女の子とだってあまり話せてないじゃん」

グサツ…。こいつ、オブラートという言葉を知らないのだろうか。いや、知るわけがないか、咲恋だもんね。

でも確かに、男子高出身のせいか、僕は女の子に対して全くと言っていいほど免疫がない。

咲恋みたいな同期の女の子にはだいぶ慣れたけど、先輩や後輩となると、からきしダメだ。

「ていうか、本当に誰でもいいんだって！ どうせ僕みたいな男に、選ぶ権利なんかないわけだし。それに、どうせみんな何も書いていないんでしょ？ いるわけがないじゃん。こんな所に、特定の人の名前を書くなんて…」

「いるよー、何人かは。まっちゃんとか、奏ちゃんとか」

「えっ、奏ちゃんが！」

言うてから「しまった！」と思ったけど、もう遅かった。

「…なるほどー、中井さん。そういうことですかあ」

僕の肩をポンポンと叩きながら、咲恋がそう言って満面の笑みを見せる。

面倒くせー、こーいった類の話になると、咲恋はいつにも増してうざくなる。

「そっか、奏ちゃんがいいのかあ。うーん、でもなー。彼女の気持ちもあるしなあ…」

そう言って頬杖をつきながら悩み始める咲恋だけど、どうせレンコンみたいにすかすかな頭なんだ、何を考えたって結論なんか出てくるわけがない。

それにしても、咲恋の反応…。

アンケートの作成者だから、咲恋は当然、みんなから集めたアンケートを見ているはずだ。

もちろん、奏ちゃんのも。

その咲恋が見せる、この反応。

「…誰なの？奏ちゃんが書いた人の名前って」

そう呟く声が、思わず震える。

「知ってるんでしょ？教えてよ」

やっぱり奏ちゃんは、僕の名前を書いてくれなかったみたいだ。

しかも、「彼女の気持ちもある」って…。

それって要するに、他の人の名前が書かれていたってこと？

だとしたら、僕は完全にピエロじゃないか。ははっ、やっぱりこ  
うなるわけか。

早まらなくてよかった。今年も、つまらない100ハイになりそ  
うだ。

「いやー、さすがにそれは、プライバシーの保護と言いますか…」

「知らないよ。こんな部活に、プライバシーもクソもないよ」

「ぶっちゃけるねー、中井さん」

「だから、早く教えて」

「まあ、そこまで言うんだったら、教えてあげてもいいけど…」

そう言いつつも、咲恋の様子はどこか煮え切らない。

「うーん、でもなあ。言っても、あんまり意味ないと思うよ?」

「いいから、早く教えてよ」

イライラしながら、咲恋を急かす。

もちろん、僕がそんなことを知ったところで、今さらどうしようもないというのはわかっている。

でも、そうでもしないと、とてもじゃないけどこのもやもやした気持ちに整理をつけられそうにない。

「じゃあ、言うよ?」

ふて腐れたような顔をしながら、咲恋が言う。

思った通り、ロビーがだんだん騒がしくなってきた。

聞き逃さないように、咲恋の方に耳を向けながら、息を飲むようにして次の言葉を待つ。

「『テク×2（テクテク）』」

「はい?」

「だから、『テク×2』。それが、奏ちゃんがこの空欄に書いた人の名前だよ」

そう言って、咲恋が口を尖らせる。…いやいや、ちょっと待って。

何だよ、「テク×2」って。

彼女の火星語でそんな風に呼ばれる人、今のローバーにいたっけ?

## 7 歩目：宿題×迷路

「誰だよ、『テク×2』って？」

「知らない。だから言ったじゃん、『言っても意味ないよ』って」

「でもそう書いてあるってことは、ローバーの中に『テク×2』って呼ばれてる人がいて、奏ちゃんはその人と一緒に歩きたいってことだろう？」

「そうだろうけどさー。でも、仕方ないじゃん。わたし『テク×2』って誰のことを言ってるのか、さっぱりわからないもん。ぶっちゃけ、すごく困ってるんだよねー。あの子、一体誰と組ませて欲しいんだろう？」

お手上げといった様子で、咲恋が首を傾げる。

やっぱり、咲恋も知らないのか。となると、現時点で「テク×2」と呼ばれている人はいないと考えてよさそうだ。

だとしたら「テク×2」は、まだ火星語で呼ばれていない人のうちの誰かってこと？

「まあ100ハイのペアだから、女の子ってことはないよねー」

「あと、既に火星語の名前が付けられている男も、候補から外れるよね」

「なるほどー。だったらもう、中井さんでいいか」

「ちよつ、何でそうなる？」

「いいじゃん。中井さん、まだ火星語の名前がないんでしょ？」

「まあ、そうだけど…」

「だったら、なっちゃんえよ、ユー。彼女が望む、『テク×2』さん  
つてやつにさ」

「えっ？僕が…」

「テク×2」に…なる？

それは考えもしない発想だった。でも、こういうことは考えられないだろうか。

もしかしたら奏ちゃんは、特定の人物を意識して「テク×2」と書いたわけじゃないかも知れない。

今回、一緒に100kmを歩く相手に、「テク×2」になって欲しいんじゃないだろうか。

だったら、僕が「テク×2」になってしまえばいい。

それはなんだか、僕が彼女にとって、特別な人間になることのように思えた。

「まあ、奏ちゃんのことだから、適当に書いただけっていう可能性もなきにしもあらずって感じだけど…」

腑に落ちない様子で呟く咲恋の隣で、僕はすっかり舞い上がっていた。

僕が「テク×2」になるってことはイコール、奏ちゃんの彼氏になるってことでもいいのかな？ いいなあ、それ。

奏ちゃんはちょっと変わっている子だけど、その辺の女の子よりは桁違いにかわいいし、付き合うことになったら、すごく楽しそうだ。

「咲恋。『テク×2』って、一体どういう人のことを言ってるんだろっね？」

「知らないよー。それくらい、自分で考えなさい。まさに『ラブの宿題』ってやつ？ いいなー、うらやましい」

そう言って、咲恋が立ち上がる。

「じゃあ、わたしそろそろ行くね。頑張るんだよ、中井さん。ぶっちゃけわたし、ずっと心配してたんだから。だって中井さん、しーちゃんとあんなことになってから、ずっと…」

「…咲恋！」

自分でもびっくりするくらい的大声が、突然口から飛び出した。

でもそうなってしまつほど、しーちゃん　　大山紫穂<sup>おおやましほ</sup>ちゃんの名前は、僕にとって耳に痛すぎる名前だ。



「…その話はもう、忘れたいんだよ」

やっこの思いで言葉を吐き出す。

そうか、あれからまだ、半年しか経っていないんだよな。

バカだなあ、僕は。また同じ失敗を繰り返そうとしていたなんて。

しーちゃんをあんな目に遭わせてしまった時、身が焼けるほど後悔したばかりじゃないか！

僕みたいな男が誰かを好きになるなんて、それはもう犯罪行為に等しいんだ。

だからもう、誰かを好きになるのは止めようって。

「忘れるなんて、そんなのズルすぎるよ」

呆れた風に言い捨ててから、咲恋は講義棟の外に出て行った。ふと外を見ると、例のベーゴマ集団も練習を止めて、そそくさと帰る準備を始めていた。

そんな中で僕だけが、永久に抜け出せない迷路の中を、ただ闇雲に、ぐるぐるぐるぐる、回り続けている。

## 8 歩目：レンタカー×虫

後輩たちが100ハイマジックの話を訊いてくるたびに、わたしは笑顔で「そんなものはないよ」と答えている。

まるで、2年前の自分を笑い飛ばすかのように。

わたしたちは決して、ドラマの中のヒロインじゃない。

非日常で芽生えた恋愛感情を、そっくりそのまま日常に持ち込め  
ると思ったら、絶対に痛い目に遭う。

しょせんマジックは、いつか消えてなくなってしまうものだから。

「レンタカーって、こんなにするんだ…」

家のパソコンの前に座りながら、ため息をつく。

8人乗りだと、24時間で1.5万円から2万円。これにガソリン代と駐車場代、更に差し入れ代まで加えたら、3万円はかかってしまいうだ。8人で負担するとしても、1人4000円は覚悟しない。

うわー、痛い出費だ。5人乗りに変えようか？

でも、大量のリタイア者が出た時のことを考えるとなあ。

5人乗りだと、一度に全員運びきれないかも知れない。

…よしつ、決めた！やっぱり8人乗りにしよう。

こんなところでケチっちゃダメ。なにせ今年の100ハイは、かなり過酷な田舎道を歩くんだ。

ちゃんとした車を借りて、万全の体制でみんなをサポートしてあげなくちゃ。

8人乗りのワゴン車を選択してから、予約フォームの氏名欄に「ふかやはるみ深谷春美」と打ち込む。

それにしても、レンタカーの予約くらい、自分でやりなさいよと言いたい。

面倒なことは、全部わたしに押し付けるんだから、航大のやつ。こっだい

でも、仕方がない。運転手はあいつしかないわけだし。

下手に怒らせて、へそを曲げられてしまつては困る。

ていうかそもそも、当日応援に行ける4年が、わたしと航大しかないのは何で？

みんな就活だ研究室だつて、言い訳ばかりして。

4年がサポーターに回つてあげなきゃ、参加者の応援やリタイア者のケアをする人が、誰もいなくなっちゃうじゃない。

予約フォームの欄を全て埋めたのを確認してから、送信ボタンを押す。

よしつ、これで1つ、仕事が片付いた。はあ、疲れた。ベッドに飛び込み、思い切り体を伸ばす。

明日は部会。そこでいよいよ、今年の100ハイのペアが発表される。

わたしは歩かないから関係ないけど、なんとなくドキドキしてしまっ。

誰と誰と一緒に歩くんだろう。楽しみだなあ。

なにせ100ハイには、ペアの組合せの数だけ、ドラマがある。

わたしにもあった。

2年前、わたしはドラマの中のヒロインだった。

少なくとも、あの100kmの間だけは。

外から、虫の声が聞こえてくる。静かな夜。このまま寝ちゃおうか。

そう思って、パソコンの電源を切ろうと起き上がる。

「ピンポン」

そんな風に鳴く虫なんかいたっけ？

いやいや、そんなのいるわけがない。普通に考えて、チャイムの

音だ。誰か来た。

…いや、ヤツが来た。来てしまった。

うわー、サイアク！これからベッドの中でぬくぬくしようと思っ  
ていたのに。

夜の21時に、女の子の家にアポなしで来るなって、一体何度言  
ったらわかるんだろう。

「ピンポーン」

また鳴った。どうする？居留守を使う？

…いや、無理だ。窓から思いっきり明かりが漏れているし。

仕方がない。1%だけ、あいつじゃない可能性にかけて、インタ  
ーフォン越しに訊ねてみる。

「…どちら様？」

「オレ様だよ。早く開けろ、クソガキ」

何が「オレ様」だ。また突然やって来たりして。笑顔で死ね！

## 8 歩目：レンタカー×虫（後書き）

100ハイにはサポーターの存在が不可欠です。

サポーターはコースを車で回り、チェックポイントでお菓子を配ったり、リタイア者を運んだりします。

今回からしばらくは、そんなサポーター側      ハルさんのお話です。

## 9 歩目：寄生虫×ドーナツ

これから1人暮らしを始めようと考えている大学生には声を大にして言いたいんだけど、絶対に大学近くに住むべきじゃない。寄生虫のターゲットにされかねないからだ。

「おつ、うまそうなもの発見」

例えば、もりや「つだい守屋航大いという名の寄生虫。

ひょろつと背が高く、無精ひげが小汚いこの虫は、人の家に来たら冷蔵庫の中を勝手に漁り出すことなんか当たり前。

過去には机の引き出しや押し入れの中まで荒らされて、もう何度本気で駆除しようと思ったことが。

でも、そんなことを思っていたのも今は昔。4年目を迎えた最近では、すっかりあきらめてしまっている。

だって、何を言っても言うことなんか聞かないんだもん。

「おいつ。何で梅酒が置いてねーんだよ！」

「いや、むしろ何で置いてなきやいけないの？」

冷蔵庫の中に首を突っ込んでいる航大に、呆れた声で文句を言う。だから、ここはあんたの行きつけの居酒屋じゃないからね。

「仕方ねーな。おい、つかさ司。ちょっとコンビニに行って買ってこい」

「わかりました。ここに来る途中で見かけたやつですよね？」

「そうそう。じゃあ、頼んだぞ」

「はい。行つてきます！」

「あつ、司！ついでにお菓子も買つてきてねー」

リビングから顔だけを出しながら、玄関で靴を履く司くんをかけたのが、1年生の齊藤由梨枝ちゃん。さいとうゆりえ

ニコツとした時に見える八重歯が、ウサギみたいでかわいらしい。

ちなみに、さっき買い物に行つた石川司くんも1年生。いしかわつかさ

今日わたしの家に来たのはその2人に加えて、同じ1年生の杉山悠馬くんまゆつまと岡田春海ちゃんおかたはるみ、そして唯一の2年生である青木奏ちゃんあきみの計6人…って多過ぎ！

航大のやつ、どうやら部室で暇を持て余していた子をみんなうちに連れて来たみたい。

6畳しかないリビングに6人で来られたら、狭過ぎてゆつたり足を伸ばすこともできないじゃない。

とは言つものの、かわいい後輩たちに罪はない。

せっかく遊びに来てくれたんだ、何かおいしい物でも作ってあげよう。



そう思って、未だに冷蔵庫の中を漁り続けている航大を蹴飛ばしてから、中にある適当な食材を取り出す。

「へー。コハル、ドーナツが苦手なんだ」

「そうなの。なんか、あの油っこいのとパサパサした感じが、どうしてもダメで…」

キッチンで手を動かしていると、背中越しに女の子たちの会話が聞こえてくる。

ちらりと振り返って確認すると、どうやらドーナツの美味しいお店を特集しているテレビ番組を観ているみたい。

ちなみに「コハル」というのは岡田春海ちゃんのこと、名前が同じであるわたしと区別するために、みんなから「コハルちゃん」と呼ばれている。

それなのに、身長が148cmしかないわたしは、彼女よりも背が低い。

うう、一体どっちが「コハル」なんだか。

それでも、彼女はわたしのことを姉のように慕ってくれるからかわい。

あのくりくりした瞳で「ハルさん」なんて抱きつかれたら、男でなくても惚れてしまいそうになる。

「えー。コハルそれ、絶対に人生損してるよ」

「えっ、そうかな？」

「そうだって。ですよ？奏さん」

「本当だよ。毎日めちゃしか食べれないこっちの身にもなってよ」

出た、奏ちゃんの名ばかり貧乏自慢。フライパンを振りながら、苦笑いを浮かべる。

去年までは本気で信じていた部分もあったけど、1泊3日で3万円もかかるスキー合宿のお金を、何の躊躇いもなく出したくらいだ。

実際そんなにお金に困っているようには思えない。

まあ、何のために貧乏を演じているのか、全くもって謎だけど。

## 9 歩目：寄生虫×ドーナツ（後書き）

守屋航大、石川司、斉藤由梨枝、杉山悠馬、岡田春海と、一気に5人も新キャラ出してすみません。

今後も出てくるので、だんだん覚えてくれればと思います。

## 10 歩目：小さい×0 点

「『チョコ×2（チョコチョコ）』さん。何か手伝いましょうか？」

「ううん、大丈夫。もうできるから」

そう言って、炒め上がった料理を大皿に乗せる。うん、有り合わせの野菜とお肉で作った割には、上出来だ。

それにしても、奏ちゃんのわたしの呼び方。

「小さくてかわいいから」って理由で「チョコ×2」らしいけど、背が低いことを気にしているわたしとしては、なんとも言えない微妙な名前だ。

さて、完成した料理をテーブルの上に置いてから、ベッドの上に腰かける。

司くんには悪いけど、わたしたちは先に乾杯することにした。

航大が買ってきたビールを、コップに注ぐ。

みんなが窮屈そうにカーペットの上に座る中、わたしだけがベッドの上で優雅にくつろげるのは、家主の特権というものだ。

ベッドに這い上がるうとする航大は、もちろん笑顔で蹴落とした。

ペア発表を翌日に控えているせいか、みんな100ハイのペアに関する話題で盛り上がっている。

「あのひとだけは歩きたくない」とか「あの二人がペアになったらおもしろそう」とか、本人の前では絶対に言えないことを、好き放題言い合っちゃって。

まあ、それが宅飲みならではの楽しみだけど。

「悠馬と組まされるとか、どう考えたって罰ゲームだわー」

「確かに。スタートから逆方向に歩きそうだもんな」

ただし、悠ちゃんだけは例外みたい。本人の目の前で、由梨枝ちゃんと航大がバツサリ切り捨てる。

ずいぶんキツイことを言われているけど、別に嫌われているわけじゃないよ、たぶん。

気弱そうな顔をしているせいか、悠ちゃんはこんな風に、みんなからよくいじられるのだ。

「そんなことないですよ。地図は完ぺきです。見て下さいよ、ほら」

そう言って、悠ちゃんがカバンから地図を取り出して見せる。

「…バカか、お前？奥多摩を歩くのに、東京23区の地図なんか役に立つわけねーだろ」

「えっ？だって100ハイって、オシャレな夜の銀座を歩くんじゃない？」

「それは去年の話だよ」

「えっ？それじゃ、スカイタワーのすぐ近くを歩くっていう話も……」

「うっさい。もうしゃべんな、ドーナツ野郎」

「ちょっとそれ、どういう意味ですか？」

「ドーナツみたいに頭の中がスカスカってことでしょ？」

「違うよ。きつと、ドーナツみたいにパサパサして気持ち悪いって意味だよ」

「違うよ。悠馬は何をやっても0点だから、『ペケ×2（ペケペケ）』なんだって」

最後の奏ちゃんの意見はよくわからないけど、何にせよひどい言われようだ。

かわいそうな悠ちゃん。ここまでくるといじられているというより、本当にいじめられているんじゃないかと、心配になってしまう。

## 11 歩目：トキメキ×おしゃべり

「ていうかコハル、咲恋さんが作ったアンケートがあつたじゃん」

トイレから帰ってきた由梨枝ちゃんが、コハルちゃんに訊ねる。

「あそこに、誰か一緒に歩きたい人の名前とか、書いたりした？」

「ううん。書いてない」

「やっぱり？ 奏さんは？」

「うんにゃ、何も」

「オレも、書いてないや」

「あなたには訊いてないから」

厳しいなあ、由梨枝ちゃん。

しっかり者だから、どこかぼんやりしている悠ちゃんを相手にすると、ついつい言い過ぎてしまうみたい。普段はそんな子じゃないんだけど。

「やっぱり、誰も書かないんだー。何だ、つまんないの」

「由梨枝ちゃんは、書かなかったの？」

ネコのクッションを抱えながら、気になって訊ねてみる。

「書きましたよー。『3人組がいいです』って」

「なるほど。それが正解だよ」

「えっ、そういう風に書いてもよかったんですか？」

「もちろん。別に、『男の子と2人きりで歩かなきゃいけない』なんていうルールはないわけだし」

要するに100ハイは、夜中に女の子を1人きりにさせなければ、誰と歩いてもいいってこと。

男2人の女の子1人という逆ハーレム状態で歩いたっていいし、複数のペアが集まって5、6人の集団で歩くことだってある。

その方が、会話が弾んで絶対に楽しいと思う。

それを勘違いする下心丸見えの男子がたまにいるから、女の子は困っちゃうというわけ。

「だったらわたしも、そう書けばよかったなあ」

「大丈夫だよ。もし別のペアになったとしても、合流して一緒に歩こうよ」

「ほんと？ やったー、それなら安心」

そう言って、コハルちゃんが顔をほころばせる。



「でも、もしあそこにお互いの名前を書き合っている人たちがいたら、素敵だなーって思わない？」

うつとりした声で、由梨枝ちゃんが言う。

「ないですかね？そういう100ハイマジック」

彼女の期待に満ちた視線に、思わず苦笑いを浮かべてしまう。

出た、100ハイマジック。…そうだね、気になっちゃうよね。

でも、すぐにわかると思うよ？

そんなのは、一時の気の迷いに過ぎない。吊り橋効果と一緒になんだ。

だからわたしはいつもの答えを、頭の中から機械的に取り出すことにする。苦い思い出が、蘇ってくる前に。

「ないって、そんなの。少なくとも、わたしがローバーに入ってから3年間は…」

「おいっ。ナシオのやつはどうしたんだよ？」

ただ、いつもと違ったのは、そこに航大がいたということ。

## 12 歩目：気にする×気にしない

「誰ですか？ナシオって」

「そうか、お前らは1年だから知らねーのか」

興味津々といった様子で訊いてくる女の子2人の前で、航大が下品な笑い声を出す。

「今年卒業したOBでこいつの元カレなんだけど、マジでウケるんだぜ？2年前の100ハイで…」

「ちよつと、航大！それ以上余計なことをしゃべったら、マジで追い出す…」

「ピンポーン」

わたしが航大に掴みかかろうとした瞬間、絶妙なタイミングでチャイムの音が鳴り響く。

どうやら、司くんが帰って来たみたい。オートロックだから、わたしが鍵を開けてあげないと入れないのだ。

「うわっ！すげーうまそうな匂い！」

入ってくるなり、司くんが日に焼けた顔をほころばせる。

「ずるいじゃないですか。先に乾杯してるなんて」

「悪いな。金はあとで払うから」

「ねえ、司。お菓子は？」

「ああ、買ってきたよ。みんなで食べれそうなものを、適当に」

そう言って司くんが机の上に置き始めたのは、ポテチ、さきイカ、チョコレート…。

「マジで！？司、空気読み過ぎ！」

彼が最後に取り出したお菓子を見た瞬間、あまりの偶然にみんなで大笑いしてしまった。

ただし、悠ちゃんを除いて。

「このドーナツは、悠馬が食べなよ」

「いつ、いらないよ！あんなこと言われたばかりなのに」

「あたしだって！このドーナツがどうしてもあんたの顔に見えて、食べる気が失せるんですけど！？どうしてくれんのよ！あんたのせいで、もう一生、ドーナツが食べれなくなっちゃったじゃない！」

「そんな、無茶苦茶な…」

「何？みんな食べないんだったら、わたしがもらっちゃうけど」

みんなが呆気にとられる中、颯爽とドーナツの袋を開けて食べ始める奏ちゃん。

こんなグダグダな感じで、ペア発表前日の楽しい夜は更けていき  
ましたとき。

おかげでこれ以上、わたしと梨田紀之<sup>なしたのりゆき</sup> 通称ナシオさんとの関  
係を、みんなにほじくり返されることはなかった。

12 歩目：気にする×気にしない（後書き）

100 ハイに対して、中井さんと真逆の考えを持つハルさん。

100 ハイに、相当嫌な思い出があるんでしょうね。

### 13 歩目：ケニア×ゴリラ

モーリス・サトゥンが死んだ。

…えっ、「誰だよ、そいつ？」だつて？

何だ、お前、オリンピックの金メダリストの名前も知らねーのかよ。仕方がねえ、教えてやる。

一言で言えばあいつは、黒い弾丸と呼べる存在だつた。

当時高校で陸上をやっていたオレは、ケニアからやってきた怪物の走りを映し出すテレビの前で釘付けになっていた。

ていうか、脚太っ。一体何を食ったら、あんな鉄パイプみたいな脚になるんだよ。やっぱり、チーターの肉か？ケニアだしな。

その後はオレも「豊島園が生んだ金メダリスト」を目指して、練習ではサトゥンのランニングフォームを真似て走ってみたりもした。

だが案の定、無理がたたって股関節を痛めちまつた。やっぱりダメか、チーターの肉を食わねーと。

だがそんなもの、その辺のスーパーで売っているわけがない。代わりに当時のオレが求めたものは、タバコだった。走れないストレスは、それでごまかした。

そうしたら脚が治った頃には、わざわざむせ返りながら走らなきゃいけない理由なんか、すっかり忘れちゃっていたんだ。

そんなサトウンが昨日、車に撥ねられて死んだというニュースが流れた。どんくせーなあ。陸上の金メダリストだったら、車くらい避けるよ、全く。

「…さん！哲さん！」

ボーっとした意識の中で、キャンキャンとうるさい声が聞こえてくる。

「…何だよ、寝かせろよ、ゴリエ」

「ゴリエじゃないです、ユリエです！ていうか哲さん、いい加減に起きて下さい！」

そう言っで、由梨枝がオレの体を掴んで無理やり起こそうとする。ああ、うぜー。せつかく気持ちよく居眠りしていたのに。

うつすら開いた瞼の向こうに、出来損ないのウサギみたいな顔がぼんやり見える。

本当についてねえ。せつかくの100ハイなのに、こんな色気のねーガキと一緒に歩かなきゃいけないなんて。

マスオさんとの3人組じゃなかったら、開始5分でケンカしてリタイヤしちまうところだ。

「もう、本当にサイアク！マスオさんが一緒じゃなかったらあたし、100ハイボイコットするところでしたよ！」

由梨枝の声をうつとおしいと思いつつ、ソファからゆっくり体を起こす。

そう言えば今日は、マスオさんと由梨枝の3人で1000ハイの打ち合わせをするために、部室に集まったんだっけ。面倒くせーんだよな、コース取り。

まあ、そんなの全部マスオさんに任せちまえばいいんだ。なにせマスオさんこと増尾圭<sup>ますおけい</sup>さんは、今まで2年連続で完歩に成功している、名うての100ハイマスターだからな。

現に今も机の上に地図を広げながら、熱心な様子でコース取りをしてくれている。

頼りにしていますよ、マスオさん。これで毛根の方ももう少しだけ頼りがいがあったら、完ぺきなんですけどね。

「ねえ、マスオさん。何でコハルじゃなくて、あたしが哲さんの生贄にされなきゃいけないんですか？」

「何だと、誰の生贄だって？ シリエのくせに」

「シリエじゃないです、ユリエです！ もう、本当に失礼！」

どっちがだ。全く、何でこんなやつなんかと…。

そもそもオレは、コハルちゃんと歩きたかったんだ。

なにせ1年の女の子の中じゃ、ずば抜けてかわいいからな。



だから咲恋さんのアンケートにも、ちゃんとコハルちゃんの名前を書いたって言うのに！

「すまん、由梨枝。コハルちゃんを松山の魔の手から守るには、こ  
うするしかなかったんだ」

「ちょっと、『魔の手』ってどういう意味ですか、マスオさん！」

「いやいや、それより！だったら、何であたしはこの人の魔の手か  
ら守ってくれないんですか！？」

「うるせえ！黙ってる、ケツエ」

「ケツエじゃないです、ユリエです！もう、いい加減お尻から離れ  
て下さい！この変態！」

「まあ、待て。落ち着けて。ほら、コース取りもだいたい決まっ  
たから。見てみなよ」

そう言って話を強引に終わらせようとするマスオさんに勧められ  
て、渋々地図を覗き込む。

まあ詳しいことはよくわからんが、あのマスオさんが決めたコー  
スだ、今年こそ途中で道に迷うことはないだろう。もうこの際、完  
歩さえできれば、あとはどうでもいいわ。

### 13 歩目：ケニア×ゴリラ（後書き）

3人目の主人公は、豚の丸焼き編でも出てきた松山哲。哲×由梨枝×マスオの3人組で歩くようです。

#### 14 歩目：自販機×呪い

「中井。お前らのところは、まだ終わんないのか？」

中井と火星人が座っている方に向かって、マスオさんが声をかける。

「中井」って心の中じゃ呼び捨てにしているけど、一応学年はマスオさんと同じで、オレより1つ上の3年だ。

でも、「さん」付けするには値しないほどシヨボい存在だから、直接話す時以外はたいてい呼び捨てで呼ぶことにしている。

まあ、向こうが勝手にオレのことを避けるから、直接話をする機会なんかそんなにないけどな。

「うん、あと少し。ねえ、奏ちゃん。坂がきついけど距離が短いコースと、坂はないけど距離が長いコース、どっちがいい？」

「坂がなくて、距離が短いコースがいいです」

「いや、だからないって。そんな楽なコース」

「あと、できれば自動販売機がたくさん置いてある道がいいです」

「えっ、何で？」

「お金が落ちてるからに決まってるじゃないですか」

「……」

あの2人、確か豚の丸焼きに行った時から、一緒に歩くとか何とか言っていたな。けっ、面白くねえ。中井のくせに、紫穂の件で懲りたんじゃねーのかよ。

まあ、火星人のやつにその気があるとは到底思えねーが、何にせよ、純粹に己の限界に挑戦すべき100ハイでそういうセコい考えをすること自体が、オレは気に食わなかった。

本当に好きだったら、正々堂々と正面からぶつかりやいいだろうが。

そんな勇気も技量もないチキン野郎が、ここぞとばかりに100ハイのルールにかこつけやがって。

これだから、童貞をこじらせたやつは嫌いなんだ。あーあ、また一混乱が起こりそうだ。マジで面倒くせえ。

もつとも、あの火星人のことだ。中井ごときにちょっかいを出されたくらいで、紫穂みたいに部活を辞めちゃうなんてことはないと思うけどな。

「あつ、『プワ×2（プワプワ）』だ」

「奏さん、こんにちはです」

ガチャリと部室の扉が開くと同時に、コハルちゃんがやって来た。フリルのワンピースを着ていて、今日もマジでかわいい。

でも純粹過ぎるから、手を出そうって気にはあんまりなれないんだよねー、これが。きつとまだ、男とキスしたことさえないんだろ  
うな。

「どうしたの？コハルも、100ハイの打ち合わせ？」

「うん。そうだよ」

「そっか。コハルは誰と歩くんだっけ？」

「ジョーさん。4年生の」

「マジかよ、コハルちゃん。それはツイてねーなあ」

「えっ、どうしてですか？」

「気を付けた方がいいよ。あの人、100ハイに呪われてるから」

「えーっ！？そうなんですか？」

ソファに腰かけて表情を曇らせるコハルちゃんに向かって、話を  
続ける。

「とにかくジョーさんは、完歩に縁がねーんだよ。別に体力や根性  
がないっていうわけじゃないんだけど、1年の時は100kmを歩  
き切ったにも関わらず、24時間を越えちゃったせいで完歩が認め  
られなかったっていう話だし、2年の時は風邪をこじらせたせいで  
不参加、そして去年なんか、途中でぎっくり腰になっちまって、連  
れて帰るのが大変だったんだから」

「なんかジョーさん、かわいそうですね」

「だろ？この調子だと、今年は車に撥ねられて病院送りなんてことも…」

「えーっ、嫌です。そんなの、怖いです…」

「ちょっと、哲さん！あたしのかわいいコハルを、あんまり怖がらせないで下さい！」

「お前とは話してねーんだよ、ケツゴリラ！」

「ケツ、ケツゴリラはさすがにひど過ぎる…」

拗ねてそっぽを向く由梨枝はさっさと無視して、コハルちゃんと話を続ける。

「でも…。だったら、わたしが頑張って、ジョーさんの呪いを解いてあげたいです」

「マジかぁ。泣かせるねえ、コハルちゃん」

何だかんだ言って、彼女の一番の良さはこの健気さだと、改めて思う。由梨枝のやつに、爪の垢を煎じて飲ませてやりたいくらいだ。

「ねえ、コハル。100ハイ、絶対に完歩しようね」

「うーん。でもわたし、正直に言って、あんまり自信ないなあ」

「大丈夫だって、コハルちゃんなら。由梨枝は知らんけどな」

「ちょっとそれ、どういう意味ですか？」

「だってお前、合宿の時だって、すぐに『疲れたー』って言って座り込むじゃねーか」

「そんなことないです。100ハイは、大丈夫です」

「いいや、無理だね、絶対。お前みたいな根性なしに、完歩なんかできるわけがない」

「そんなことないもん！」

そう言つて、由梨枝が顔をムスツとさせる。

「じゃあ哲さん、もしあたしが完歩できたら、お寿司を食べに連れて行つて下さい」

「上等だ。回転寿司どころか、回っていない寿司屋にだって連れて行つてやるよ」

「言いましたね？絶対、約束ですよ？」

「わかつたつて。その代わり、オレはお前がちょっとでも『もう無理ですう』とかほざき出した瞬間に、置き去りにしていくからな。覚悟しておけよ」

「いいですよ。あたし、そんなこと絶対に言いませんから」

本当にかわいくねーやつ。だが、これでいい。去年完歩できなかった

ったオレには、もう後がねーんだ。

2年連続で途中リタイアとか、オレにとっては切腹レベルの大恥だからな。

とにかく今年は、足の骨を折ってでも完歩しなくちゃならない。

そのためには、いざとなったら、ペアを組んでいる相手を置き去りにしていく覚悟だってできている。

たといえ「人でなし」と言われたって構わない。

結局100ハイなんて、マラソンと同じ。最後に信じられるのは、自分の力だけだ。



## 15 歩目：太陽×雑草

コートを着て、部室を出る。ローバークルー部の部室が入っている部室棟は、壁にとこところ見られるヒビや落書きなんかに象徴されるように、築30年になる古いコンクリートの建物だ。

なんでも、3月に発生した大震災のせいで、微妙に傾いてしまったとか。ああ、おつかない。学校側も、早く立て直してくれたらいいのに。

1階に下り、自転車置き場の方に向かって、グラウンド沿いの広い通りを歩き始める。

11月の夜の空気は、2週間ほど前に開催された大学祭を境に、ぐんと冷え込みが強くなったような気がする。

本番の夜も寒いんだろうな。過去2年間の経験から言うと、朝方の冷え込みは吐く息が白くなるほど厳しくなる。

よし、あとで奏ちゃんに「当日はカイロの準備を忘れないように」ってメールしてあげよう。そんな気の利いたメールを堂々と送れるのも、100ハイでペアを組む者ならではの特権だしね。

…そうか、僕。本当に奏ちゃんと、100ハイを歩くことになったんだよなあ。

はちおうじにつかだいがく  
八王子工科大学を出発して、のどかな風景が広がる青梅周辺を歩く。

そこから甲州街道を経由して、豊かな緑が生い茂る井の頭森林公園<sup>うえん</sup>を通る。

その後は真夜中の五日市街道をひたすら西の方に進み、夜が明ける頃に多摩川を渡って坂が多い八王子の住宅街を通り抜けつつ、再びスタート地点に戻ってゴールになる。

今日奏ちゃんと打ち合わせをする中で改めて思ったんだけど、今回のコースで間違いなく、一番のクライマックスになると思われるのが、真夜中の五日市街道だ。

なにせものすごい田舎道だ。真夜中じゃ人も車もほとんど通らないだろうし、照明だってそんなにないはずだ。

足の疲労がピークに達する中、そんな真っ暗で寂しい道を、ひたすら15 km、直進し続ける。

肉体的にも精神的にも辛いと思われる、この15 km。

一体何人の参加者が、この難所で挫折することになるんだろう。

でも、何かが起こるとしたら、そこしかないんだろうなとも思う。

…いやいや、変な期待なんかしちゃダメだ。

僕の役目は、奏ちゃんを完歩させること。それ以上のことは、何も起こらない。

いや、起こしてはいけない。

そうでないと、またしーちゃんの時の二の舞に　その瞬間、門  
を出る直前で、ピタリと足が止まる。

…何でこのタイミング？いや、それよりもすぐに引き返さなきゃ。

…いや、でも明らかに不自然だし。…ていうか、既にめっちゃこ  
っちの方を見ているんですけど。

にこりとして、大げさに手を振って僕の名前を呼ぶ彼女。

何で？あんなに後味の悪いさよならをしたっていうのに、何でそ  
んな風に、何事もなかったかのように平然と僕に声をかけることが  
できるの？

…ねえ、しーちゃん。

「やっぱり、中井さんだ！わーい、お久し振りです」

退部を承認した部会以来だから、半年振りだろうか。

門の植え込みに座っていたしーちゃんは僕の姿を確認すると、そ  
こからポンツと飛び降りるようにして立ち上がった。

ショートパンツについた土をポンポンと払い落しながら、こども  
みたいな無邪気な笑顔で僕が近付くのを待っている。

奏ちゃんも「ニコ×2（ニコニコ）」と名付けるほどの、くすぐ  
つたくて、こっちまで笑っちゃいたくなるような笑顔。

彼女のいいところは、そんな素敵な笑顔を男に媚びるためだけに

使うのではなく、僕みたいに影が薄くて日の当たらない男にまで、  
分け隔てなく振りまいてくれるところだった。

日陰に生える雑草が太陽の光に恋い焦がれるように、僕は彼女の  
笑顔に魅かれていった。

15 歩目：太陽×雑草（後書き）

久しぶりの中井サイド。そして、トラウマになってる女の子との再会。

## 16 歩目：白×黒

「今、帰りですか？」

「うん、ちよつとね」

ようやく門を抜けて、しーちゃんと言葉を交わす。

半年前までストレートだった髪は、よく見たら両サイドのところだけふわりと巻かれているようだ。化粧もしているみたい。ずいぶん垢抜けたなあ。

ヤバい、なんだか緊張してきた。動揺を悟られないように、努めて平静を装う。

「実はさっきまで、部室で100ハイの打ち合わせをしていたんだ」

「うわー！いいですね、100ハイ！懐かしいなあ。そっか、もうそんな時期かあ。早いですね」

イタズラっぽく笑いながら、彼女が僕の肘の辺りを小突いてくる。

「それで？中井さんは、今年は誰と歩くんですか？」

うーん。自分が昔振った男に対して、こういう態度を取るのは普通なのかな。まあ、それでこそしーちゃんっていう気もしないでもないけど。

彼女は遠慮とか気まずさとか、そういったものは全部海の向こう

側に投げ捨ててしまったような女の子だし。

「教えて下さいよー」と言いながらグイグイ押してくるしーちゃんだけど、なんとなく教えるのが嫌だったから、素知らぬ顔ではぐらかそうとする。

それなのにしーちゃんは、一向に諦める気配がない。「むう」と口を尖らせて、コートの裾をグイグイ引っ張って。…ああ！やめて！近い、顔が近いよ！？

「奏ちゃん、です…」

体と視線を逸らしながら、観念して白状する。

「わー、奏ちゃんですか。なるほどー。どうりでさっきまで、顔がにやけていたわけだ」

「えっ？べ、別に、にやけてなんか…」

「いいえ、にやけてました。『壁に耳あり、門に紫穂の目あり』です。気を付けましょう」

小学校の先生みたいに僕を指さして注意すると、しーちゃんは背中を丸めながら、おかしそくにケラケラ笑い出した。

それにつられるようにして、僕も「ははっ…」と、弱々しく笑う。本当にこの子は、どうしてもいつもこんなに楽しそうにしていられるんだろっ。

一通り笑い終えてから、しーちゃんが満足したような様子で顔を

上げる。

「では。引き留めてしまって、すみませんでした」

そう言つて、ぺこりと小さくお辞儀をする。僕もそれに応えて「じゃあね」と手を振りながら自転車

置き場の方に歩き始めたんだけど、途中でふと気になって振り返る。

「そういえば、しーちゃんは何でこんな所に座つてたの？誰かを待  
つてるとか？」

「えっ？まあ…。そんなところです」

なぜか言いにくそうに答えるしーちゃん。何だろう？気になった  
けど、特に深く考えることはせず、再び前を向いて歩き出そうとする。

「あの…。中井さん！」

その時、今度はしーちゃんの方に呼び止められる。振り返ると、  
10mくらい先の方で、足を肩幅くらいに広げたしーちゃんが、緊  
張した様子で立っている。

冷たい夜風がしみ込んだように、胸の奥がつーんと痛み出す。

「わたし、安心しました！中井さんは、やっぱりもっと、幸せにな  
るべきです！」

手でメガホンを作りながら、しーちゃんが大声で叫ぶ。

「だから、じゃんじゃん恋しちゃって下さい！」



がくつ。しーちゃんってば、それをキミが言っちゃうわけ？

苦笑いを浮かべながら、彼女に背を向けて歩き出す。「恋しちゃって下さい」か…。まさか彼女に、そんなことを言われる日が来るなんて。

過去に一番傷つけた人が、「恋をしてもいい」と言ってくれた。

その言葉が、僕の足取りを軽くしてくれる。今なら100kmくらい、余裕で歩いてしまいそうだ。

自転車にまたがり、今歩いてきた道を逆走する。

自転車置き場が僕の帰り道とは逆方向にあるから、毎日こんな二度手間をしなくちゃいけない。

本当に面倒くさい。立ちこぎでスピードを上げながら、門の方をちらりと見る。

しーちゃんは、まだいるんだろうか。

…いた。でも、1人じゃない。

立ちこぎ姿勢のまま、ペダルをこぐ足の動きが止まる。

だんだんスピードが落ちていく。

そんな中、車輪が回る無機質な音だけが、チリチリと聞こえてくる。

…そうか。まだ、別れていなかったんだ。

そんな黒い感想しか浮かんでこない頭なんか、この車輪に挟まれて、粉々に砕けてしまえばいいのに。

羨望、嫉妬、そして、後悔。

止めどなく溢れてくる負の感情の全てを自転車の推進力に変えて、僕は誰もいない学校前の広い歩道を、全速力で駆け抜けた。

かつて僕を振った女の子が今、別の男と付き合っているという事実能耐えられるほど、僕は人間ができていない。

…しーちゃん。こんな僕が、本当にまた人を好きになってもいいのかな？

## 16 歩目：白×黒（後書き）

紫穂との再会が、中井さんの100ハイにどんな影響を与えるか。  
連載開始から1ヶ月、次回からようやく歩き始めます。

## 17 歩目：プリン×肉まん

奥多摩には合宿で何度か来たことがあるが、相変わらず東京とは思えないほど田舎だと思う。

青梅線なんか無人駅がザラにあるし、そもそも東京のくせにマツクが夜の21時に閉まるとか、あり得ねーよ。そんなんだから、都会の住人に「奥多摩県」なんて呼ばれるんだ。

「何、あの人たち？マジでウケるんだけど…」

おいつ、そのブサイクな女子高生ども！ジロジロ見てんじゃねえ！ちくしょう、バカにしゃがって。

…だが、今のオレたちの姿を見たら、注目したくなるのも無理はない。

なにせ八王子駅のと真ん中を、黄色いゼッケンとダサイジャージに身を包んだわけのわからん大集団が、そろそろ突っ切っているわけだからな。

すれ違う人たちの視線が、マジで痛い。あー、イライラする。決めた。八王子なんか、もう二度と行かねえ。

そんなストレスを感じながらも、ようやく駅の中を通り抜ける。すると目の前に広がったのは、高いビルの間をまっすぐに伸びる、大通りの光景。

…さあ。いよいよ、ここからが本番ってわけだ。

自分の胸が、どんどん高鳴ってくるのがわかる。今までは歩道が狭い一本道だったせいで、景気よく他のペアを抜き去っていくことができなかった。

だが、ここから先は遠慮はいらねえ。体力が残っている前半戦のうちに、なるべく多くの貯金を作っておく。

それこそが去年、あの惨めな思いと引き換えに知ることができた、オレ流の100ハイ攻略法だ。

「よしっ！それじゃ、そろそろ飛ばして行きま…」

「すごい！八王子って、けっこう都会なんだね！」

一瞬、さっきの女子高生どもが付いて来たのかと思ってしまった。だが、もちろんそんなわけではない。

おいおい、今日は修学旅行に来たわけじゃねーんだよ。これから100km歩くんだぞ？わかってんのか、あの二人（由梨枝とコハルちゃん）は！

「何してんすか！早く行きましょーよ！」

叫びながら、両ひざに手をつけてがっくりする。まさか、まだ駅の出口付近をうろろしていたとは。

あーあ、スタート直前にコハルちゃんから「やつぱり、哲さんたちの組と一緒に歩いていいですか？」って訊かれた時は、一気にテンションが上がったんだけだな。

あの2人、しょっちゅう立ち止まっては写真なんか撮りやがるし、ジヨーさんはスタート直後から靴のひもが切れたとか不吉なことを言いやがるし、頼みの綱のマスオさんでさえ、地図とにらめっこしてばっかりで、さつきから全然動かねーし。もう、みんなバラバラ。

これじゃ、ちっとも貯金なんか作れねーよ。やっぱり、5人なんて大人数で歩くのは失敗だったか？

「哲さん、八王子駅の近くに、おいしいプリン屋さんがあるそうですよ」

「あっそう。だから何？」

由梨枝のねだるような視線を、冷たく突っぱねる。ナメやがって、観光に来たんだったら、1人で勝手に行ってこいや。

「そのお店、毎日のように行列ができるみたいなんですよ」

「はっ、そんなものに並んでたら、100ハイなんか終わっちゃうよ」

「ですよー。あーあ、食べたかったなあ、イチゴプリン」

「何？チチゴプリン？」

「おっぱいじゃないです、イチゴです。哲さん、昼間からサイテーです」

由梨枝はプイツと顔を背けると、今度は少し後ろの方を歩いてい

るコハルちゃんの方に駆け寄っていった。

何なんだよ、あいつ。さっきからうるちよると。

ああいうやつに限って、あとで「疲れたー、帰るー」ってグダグダ言い出すんだよな。マジでうぜー。

目の前の横断歩道の信号が、点滅を始める。本音としては、ここでダツと横断歩道を駆け抜けて、少しでも時間のロスを減らしたいところなんだ。

それなのに、誰1人として急ごうという気配が見られない。

仕方がないから、赤信号の前で無抵抗に立ち止まる。腕を組んで苦い顔をしながら、先に横断歩道を渡った連中の遠ざかっていく背中を見つめる。

…確かに、100ハイは順位を競うイベントじゃない。

24時間以内に、100kmを歩き切る。その条件さえクリアすれば、別に8時間でゴールしようが23時間59分でゴールしようが、価値は同じなんだ。

それにしても、だ。

…ちよつとのんびりし過ぎなんじゃねーの、こいつら？

100ハイには毎年、ゴールまでにいくつかのチェックポイントが設けられている。

今年は全部で7つあるんだが、それらを全部通過してゴールしないと、完歩したことにはならない。

しかも厄介なことに、各チェックポイントには、制限時間というものが設けられている。

たとえば、今目指している第1チェックポイント（1CP）の青梅市役所は、今日の20時までには通過しないと、強制的に失格にされてしまう。たとえまだ歩ける体力が残っていたとしても、だ。

まあ、さすがに1CPからこの「足切り」に引つかかる連中はまじないだろうが、これが3CP、4CP辺りになると、マジでキツくなってくる。

オレ自身は去年、道に迷って大幅に時間をロスしたせいで、4CPにたどり着く前に無念の足切りを食らってしまった。

あんな悔しい思いは、もうたくさんだ。

だから今年は前半戦で貯金を作っておきたいって、スタート前からずっと考えていたって言うのに！

「マスオさん。オレたち、こんなにゆっくりなペースで、本当に大丈夫なんですか？」

信号が青に変わって歩き始めると同時に、隣を歩くマスオさんに訊ねてみる。

なにせ5人もいるのに、この中で完歩を経験しているのはマスオさんしかいねーんだ。



とにかく今は、この人の経験を頼りにするしかない。髪の方は、相変わらず頼りなさげに風に揺れているけど。

「大丈夫だつて。今のところ、けっこういいペースで歩いてる思うよ」

鼻の頭に汗を浮かべながら、マスオさんが答える。

「でも自分、前半のうちに飛ばしてある程度貯金を作っておいた方が、あとあと楽だと思っんですけど？」

「いや、それよりも一定のペースを崩さないで歩く方が、体力の消耗が少なくて済むんだよ」

「へー。そんなもんですかねえ…」

どうにも腑に落ちないところはあつたが、2年連続で完歩している100ハイマスターがそう言うんだ。オレとしては、黙って従うしかない。

しばらく道なりを歩いていると、左手側にコンビニが見えてきた。その中から、ゼッケンを付けた連中がぞろぞろ出てくる。

はっ、バカな連中だ。こんな序盤からコンビニに立ち寄るなんて、時間の浪費以外の何物でもねーよ。

食い物は事前に購入して持ち歩き、コンビニに入るのは必要最小限に止める。

それこそが、賢い100ハの歩き方というもんだ。ほら、スカウトの偉いおっさんたちも、いつも言っているじゃねーか。「そなえよつねに」ってな。

「マスオさん、ちょっとコンビニに寄って行ってもいいですか？」

…って、ここにもいたよ、バカヤローが！

「おい、てめえ。マジでいい加減にしろよ？」

振り返りながら、イライラを隠さない声で言う。

コンビニに入ろうとした由梨枝の足が、ピタリと止まる。

自動ドアが開き、のんきな入店音が流れてきても、オレの怒りが挫けることはなかった。

「まだ歩き始めてから1時間も経ってねーんだぞ？こんなところでコンビニなんか寄って、時間が足りなくなったらどうすんだよ！」

「でもあたし、肉まんが食べたいで…」

「だから、それがナメてるって言うてんだよ！何なんだよ、さつきからプリンだ、肉まんだって。そん

なに食べ歩きがしたいんだったら、勝手にしろ！オレは先に行くからな！」

「待てよ、松山！何をそんなに焦ってんだよ？」

先を急ごうとするオレの肩を、マスオさんが掴んで戻す。

「大丈夫だって、ちょっとコンビニに寄るくらい。むしろ今のうちに寄っておかないと、この先田舎道に入っちゃうから、なかなか寄れなくなると思うぞ?」

「知りませんよ、そんなの。オレはちゃんと、食い物買つてあるんで」

「でも、由梨枝が寄りたいてって言ってるんだから。いいか、松山。オレたちは3人で1つのチームなんだ。自分勝手なことはあまり言うな」

何だと!? 一番自分勝手なことを言つてんのは、由梨枝じゃねーか!

そう言いたくなる気持ちを、寸でのところで堪える。

「いいよ。入ろう、由梨枝」

「なんか…。すみません。すぐに戻ってきます」

しゅんとした声で言ってから、由梨枝が駆け足でコンビニの中に入って行く。

「いいか、絶対に1人で先に行くんじゃないぞ!」

ふて腐れるオレにそう言つて念を押してから、マスオさんも由梨枝のあとに続いて、店内に入つて行つた。

ちくしょう、面白くねえ。マスオさんが甘やかしたりするから、

由梨枝のやつが余計につけあがるんだ。

あのガキ、100ハイをピクニックか何かと勘違いしていやがる。あーあ、マジでやってらんねえ。舌打ちしてから、ゴミ箱の前にとっかり座ってあぐらをかく。

「あの…。あんまり由梨枝を、怒らないでやって下さい」

申し訳なさそうな声で、コハルちゃんが言う。何だよ、これじゃまるで、オレが悪者みたいじゃねーか。

黙ったままふと先の方を見ると、ジョーさんが彼女を呼んでいる姿が見えた。どうやらこの2人とも、ここでお別れのようにだ。

「では、ジョーさんが呼んでますので」

そう言つて、コハルちゃんがジョーさんのあとを追いかけて行く。

その後も1組、2組と、あのダサいゼッケンをつけた連中が、当たつけるようにしてオレの目の前を通過して行く。

あー、マジでムカつく。こんなもんじゃねーんだよ、オレが思い描いていた100ハイは！

## 17 歩目：プリン×肉まん（後書き）

いよいよ歩き始めました。現在はスタート地点の八王子工科大学を出発し、1CPの青梅市役所に向かって、八王子駅周辺でケンカしているところです。

## 18 歩目：出遅れ×焦り

トンネルを抜けて階段を上ると、でかいトラックがビュンビュン走り抜ける国道16号線に入った。

近くに八王子インターがあるせいか、ガソリンスタンドと車屋がやたら多い。

とにかく空気が悪くてうるさい道だが、右手を走る車以上につるさいのが、オレの少し後ろを歩く由梨枝だった。

「マスオさん。司たちは今、多摩川を渡ってるんですって」

司との長電話を終えて、由梨枝がマスオさんに訊ねる。「同期の様子が知りたい」と言って、由梨枝はさっきから手当たり次第、電話をかけまくっていた。

ただでさえ不快な車の排気ガスと騒音に加えて、由梨枝の無駄に高いキーキーした声が、マジで耳障りだ。

コハルちゃんと別れたら、少しは落ち着くだろうと思っていたのに。テンションだけで完歩できると思っていたら、大間違いだったの。

そんな由梨枝を、オレは完全に無視することに決め込んでいた。

「ここからだ、多摩川までどれくらいかかるんですか？」

「そうだな…。たぶん、あと15分くらいじゃないかな？」

「15分かー。駅から学校までと、だいたい同じくらいの距離ですね」

「確かに。けっこう離されちまったな」

「あたし、全然走れますけど?」

「いや、大丈夫だよ。オレたちは、オレたちのペースで歩けばいいさ」

「ですよー。そうだ、悠馬はどうしてるんだろ? 確か、咲恋さんと一緒にペアでしたよね?」

「あのバカップルか。あいつら、八王子駅で迷子になってたりして」

「いやいや、あのバカのことですから、きっと間違えて東京23区の地図を持って、今頃慌ててるんじゃないですか?」

そう言ってケラケラ笑う由梨枝だが、オレから言わせれば、お前も悠馬も大して変わんねーよ。

面白い物を見つけるたびに、写真を撮るために立ち止まる。それで一体、どんだけの時間と体力をロスしていると思っていやがるんだ、こいつ?

そんなフラストレーションを抱えつつ、排気ガスを連想させる灰色のイメージがぴったりの環状線沿いを歩き続ける。

とにかく、都心にあるようなきらびやかな光景が何一つありやし

ない。去年は23区をぐるっと一周するコースだったから、もう少し楽しかったんだけどな。

更に萎えることに、八王子バイパスを越えた辺りから、だんだん緑が目立ち始める。さあ、いよいよ奥多摩県って感じだな。車と木しかない退屈な景色の中、緩やかに続く坂道をしばらく登って行く。

ここに来て由梨枝も、ようやく落ち着いて歩くようになってきた。広い歩道を3人で並んで歩きながら、他愛のない話で盛り上がる。

そのうち清掃工場の長い煙突を越え、多摩川にかかる大きな橋を渡って、オレたちは昭島市に入った。

「哲さんって、高校時代は陸上部でしたよね？」

橋を渡ってしばらく歩いたところで、由梨枝が訊ねる。

「好きな陸上選手とかいないんですか？」

「そつだな…。やっぱり、モリス・サトウだな」

「誰ですか、それ？」

「お前、モリス・サトウも知らねーのかよ」

「北京オリンピック男子マラソンの金メダリストだよ」

マスオさんに教えてもらうと、「へー、すごいですね」と、由梨枝が感心した風に頷く。



「まあ、素人にはわかんねーだろうけどな。あいつの本当のすごさなんて」

「哲さん。その人、来年のオリンピックにも出るんですか？」

「出ねーよ。死んじゃったからな」

「えっ、死んじゃったんですか!？」

由梨枝が驚きの声を上げる。

「何ですか？」

「事故だよ、事故。故郷のケニアで、車に撥ねられたんだとさ」

「えーっ、そんな…」

「でも、生きていたとしても、次のオリンピックは厳しかったかも知れないな」

マスオさんが思案げに言う。

「いろんな噂があつたよな？北京で金メダルを獲ってから、ハングリー精神がなくなったとか、不倫に溺れるようになったとか」

「結局あいつも、その程度の男だったってわけですよ」

頭の後ろで手を組みながら、醒めた口調で言う。

マスオさんの言う通り、サトウンはオリンピックが終わった翌年

の世界陸上で優勝したのを最後に、表舞台からすっかり姿を消してしまった。

傲慢な態度、コーチとの確執、そして不倫。いろんな噂が流れた。

そのうち、噂さえ流れなくなった。

ぶっちゃけ、オレもこの間のニュースを観るまでは、サトゥンのことなんかすっかり忘れちゃっていたんだ。

だが、あいつの全盛期の走りを映す映像を観るたびに、過去の黒い噂を信じたくないと思う自分がいることに気付かされる。

「モーリス・サトゥンか。何だろう？ 気になるなあ……」

由梨枝がぶつぶつ独り言を言っているところに、「とっておきのショートカットがある」と言って、

マスオさんが脇道の方に入って行った。

付いて行くと、なるほど確かに、１ミリたりとも曲がっていない細くてまっすぐな道が、ずっと先の方まで伸びている。

よし、これで少しは遅れが取り戻せそうだ。日が暮れて、足に軽い痛みを覚え始める時間帯になってきたが、オレは意気揚々とその道を歩き始めた。

ところが、この道がとにかく長げーんだよ。線路沿いを歩いているんだが、駅を３つも越えたのに、まだ第１チェックポイントに着かねーんだもん。

ショートカットって言うから、てっきり目的地までひとつ飛びつていう感じだと思っていただけだな。

辺りは照明が少なく真っ暗で、話のネタになりそうなものも何一つない。会話もめつきり少なくなってしまった。

2人の表情からは、最初の疲労のピークを迎えていることが、ありありと見て取れる。

まだ4時間、20キロも歩いてねーのに。こんな調子で、本当に完歩なんかできるのかよ？

俯き加減に歩きながら、途中リタイアした去年の嫌な記憶が、頭の中を過っていく。

目的地が全然見えてこない中、焦りと疲労と苛立ちばかりが募っていく。

「えっ、もう1CPを出たの!？」

河辺駅前の交差点を渡ったところで、由梨枝がぶっ飛んだ声を上げる。

「マスオさん、司たちの組は、もう1CPを出ちゃったみたいですよ?。」

電話を切ってから、由梨枝が不安げな様子で訊ねる。

「…大丈夫だって。オレたちも、あと10分ぐらいで着くから」

地図を確認してから、マスオさんが面倒くさそうに言う。

「10分って！マスオさん、さっきからそう言っただけ、全然当たった試しがないじゃないですか！」

「はあ？そんなことは…」

「あー、疲れたー、足痛いー、早く休みた…」

「ごちゃごちゃうるせーんだよ！黙って歩け！」

もう我慢できなかった。振り向きざまに、不愉快な文句を垂れ流す由梨枝を怒鳴りつける。

そもそも、全部こいつのせいじゃねーか。

ただでさえ歩くスピードが遅いくせに、コンビニに立ち寄りたり、写真なんか撮ったり。

オレは今年、足を潰してでも完歩するっていう覚悟で挑んでいるんだ。

それなのに、何でこんなやつに足を引っ張られなきゃいけないんだよ！

「…ごめんなさい」

いつものようにケンカになると思ったのに、めずらしくしゅんとした様子で由梨枝が謝ってくる。

それでも、その後の空気はマジで最悪だった。

実際にマスオさんの読みはまたしても外れて、10分経っても目印であるファミレスの看板さえ見えてこない。

それでも、今のオレたちに文句を言う元気なんかあるわけねーし、そもそも次に文句が飛び出したら、今度こそチームがバラバラになってしまう。そんな危機感さえ漂っていた。

「やったー！ やつと着いた！」

50メートルほど先の方に黄色いのぼりを見つけて、由梨枝が歓声を上げる。第1チェックポイントを示すのぼりだ。時間は、18時を少し回ったところだった。

「やあ、キミたち。あそこのテントが、受付だからね」

市役所の入り口で、スカウトの制服を着たメガネのおっさんに声をかけられる。ん？ このハスキーボイス、どこかで…？

「あれ？ あんた、確か…」

「ああ、キミ。確か、豚の丸焼きの時に会ったっけ？」

やっぱり、夏目さんだ。自称プロのボーイスカウトで、その正体は単なるニートという、どうしようもない大人。

「何してんすか？ こんな所で」

「もちろん、100ハイのスタッフとして働いてるのさ」

ニートが働いているっていうのも変な話だな。由梨枝とマスオさんが休憩所に入って休んでいる間、オレは暇つぶしに夏目さんと話し込むことにした。

「今年のコース、けっこうキツイでしょ？オレが考えたんだよ、実行委員会の副委員長だから」

でも、ニートなんだろ？全く、そんなことをしている暇があったら、就活しろと言いたい。本当にこいつ、一体何がしたいんだか。

「常盤松大ローバーの連中には、何人が会いましたか？」

ペットボトルのスポドリを一口飲んでから、夏目さんに訊ねる。

「うーん、全員の顔を知ってるわけじゃないから、何とも言えないけど…。ああ、そう言えば、森野さんには会ったよ」

「えっ、咲恋さんですか！？」

思わず驚き過ぎちゃった。だが、あり得ねーよ。絶対におかしいって。

だって、咲恋さんと悠馬のペアだぜ？100ハイ史上、最凶のバカップルとまで言われたあの二人だぜ？どうなってんだよ？ていうかオレたち、その2人にさえ、現時点で負けているってことかよ。

「あとねー、あの二人。ほら、キミと一緒に、豚の丸焼きに来てくれた…」

「中井と火星じ…。いや、青木ですか？」

「そうそう。その2人は、森野さんたちよりも更に早く、ここを通過して行ったよ」

「えっ？それって…」

訊きながら、脇の辺りに嫌な汗がにじみ始める。

「ちなみに、どれくらい前のことになるんですか？」

「そうだなあ。もう、1時間以上前になるんじゃないかな」

「いつ、1時間以上も…！？」

やっぱり、オレたち3人は、かなりヤバい位置にいるらしい。

何度も言うように、100ハイは順位を競い合うイベントじゃない。  
い。

だが、まだ1CPだっていうのに、同じ部活の組に、1時間以上も差を付けられちまうなんて。

焦るなと言う方が、無理な話だ。

「マスオさん！すぐに出発しましょう！」

休憩所に入ってマスオさんの姿を見つけた瞬間、飛びつくようにして声をかける。

「ああ。オレもさつきペースを計算し直して、このままじゃちょっとヤバいんじゃないかって思えてきた」

「だから言っただじゃないですか！おいつ、由梨枝！いつまでボケーっとしてんだ！早く靴下を履け！」

「あつ、はい…」

全く、靴下を取り替えて足の蒸れを防ぐこと自体は別に構わねーが、どれだけ時間をかけてんだよ。

遅い。何もかもが遅い。

靴を履く由梨枝をイライラしながら待つてから、オレたちはすぐに1CPを出発し、青梅街道に入った。

「…由梨枝？なんか、足引きずってないか？」

「いえ。そんなことはないです」

「そうか？痛くなったら、すぐに言えよ」

街路樹が並ぶ青梅街道の歩道を、オレたちは早歩きと言っていいくらいのペースで歩いていった。いや、むしろこれくらいのペースが普通なんだよ。今までが、遅過ぎただけだ。

「それより…。大丈夫ですか、時間？」

「まあ、このペースで歩き続ければなんとかなるだろう」



「ごめんなさい。あたしが遅いせいで…」

全くだぜ。申し訳なさそうな声で言う由梨枝だが、いつまでこのハイペースに耐えられるか。オレたちよりも二メートルほど後ろの方を、やっとの思いで付いて来ているという感じた。

まあ、最初から言っている通り、オレはいざとなったら、由梨枝なんか置いていくつもりでいるけどな。

「そういえば、ハルさんたちは応援に来てくれないんですかね？ てつきり、1CPで待ってくれてるかと思ってたのに」

「ああ。それなら、さつきハルさんに電話をして訊いてみたんだけど、そうしたら航大さんが『青梅は遠いから、2・5CPから充分だ』って言い張るもんだから、2CPまでは応援に行けないんだって」

「えーっ、そんなあ。寂しいなあ」

「まあ、ドライバーがあ航大さんじゃね。本当にわがままなんだから、あの人」

あきれた口調でマスオさんは言うが、あの人のことだ。きっと1CPや2CPでリタイヤするようなバカはいないと踏んで、効率よく応援に回る方法を考えたんだろう。

しかしですね、航大さん。オレたちはこのままだと、2CPでリタイヤするようなバカになっちゃうかも知れませんか？

険しい表情で歩く由梨枝の様子をちらちら見ながら、オレはそん

な懸念さえ、抱き始めていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6115y/>

---

テク×2（テクテク）

2011年12月25日14時53分発行